つながりを切らない
孤立させない
新しいつながり方を提案する

つながる通信

第4号

発行日　2020年4月30日（木）
発行元
「つながりを切らない」情報・交流ネットワーク
〒981-0932
仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1F（CLC内）
FAX：022-727-8737　E-Mail：t-net@clc-japan.com
ホームページ：準備中

こんなふうに使ってね
・民生委員、児童委員の皆さんに・・・
・サロンや地域のボランティアの皆さんに・・・
・配食のお手紙に添えて・・・

この通信の印刷、配布はご自由にご利用ください。
記事やイラストの一部を転載・転用する場合は、
t-net@clc-japan.comまで
ご連絡をお願いいたします。

電話をかけ、気になる人には生活支援を思いをつなげ、広げる

NPO法人なごみ（兵庫県西宮市）

NPO法人なごみは、小学校区に住む人を対象にした誰もが気軽に立ち寄れる「まちｃａｆｅなごみ」を運営しています。１杯１００円のコーヒーなどを飲みながら過ごせる居場所で、西宮市から一般介護予防事業を財源とする運営補助を受け、運営しています。

現在は、こうしたカフェ機能をはじめ、介護予防体操教室や夜の食事会など、まちｃａｆｅなごみで行う事業は休止となっていますが、４人のパートスタッフが、気になる人や一人暮らしの人、いつも来ている人に電話をし、安否確認や話し相手をしています。

NPO法人なごみでは、２０１９年７月から「まちのよろず屋」という生活支援事業に取り組んでいます。３月下旬から外出自粛が求められるようになったこともあり、対象エリアを小学校区から広げ、買いもの、ゴミ捨て、薬の受け取り、通院の付き添いに限定して暮らしのお手伝いを続けています。事務局長の田村幸大さんは、「定期的な片付け依頼には対応できなくなったけれど、新規の買いものの依頼が増えている」と話します。今後も外出自粛期間がさらに延長されれば、こうしたニーズはさらに高まると予想されます。また、まちｃａｆｅなごみから電話をかけて、様子が気になる人は、よろず屋で関わりを始めています。利用者のなかには、なんとか自分でやろうと思って頑張ってつらくなっている人もいたと言います。

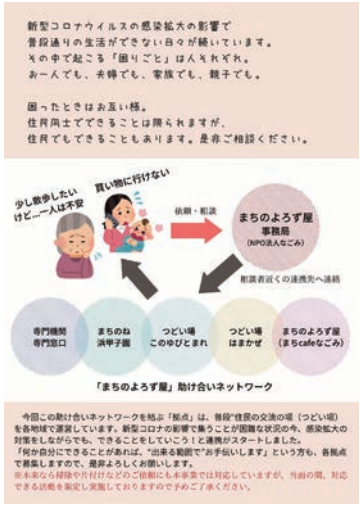
まち cafe なごみから気になる人に電話をかける

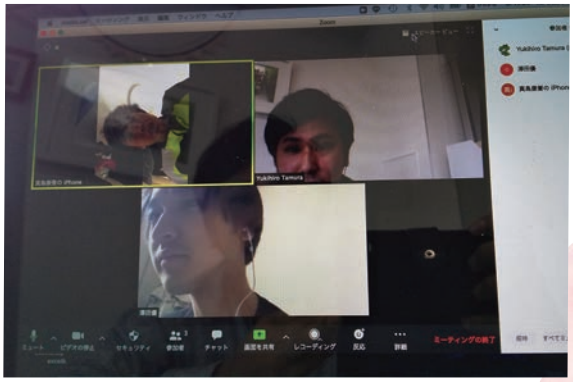
こうした取り組みにメディアも注目、新聞紙上で紹介をされると、北海道大学農学部の３人の学生から問い合わせがありました。学校が休校となり、困っている人たちが多くいる、自分たちにも何かできないか、という相談でした。そこで、オンライン会議を利用し、よろず屋の事業やノウハウを伝授しています。「まずは仲間集めをしたり、自分の買いものを友人に頼むというシミュレーションをしてもらっています」と田村さん。すでに３回の会議を重ねながら、支援へのスキルを積み重ねています。

西宮市内には、まちｃａｆｅなごみのほかに複数のつどい場があります。「つどうことへの制限があってもできることを考えよう」と、つどい場運営者とのオンラインミーティングも実施しています。各つどいの場が連携し、支え合いの輪を広げる活動がスタートします。

つながるポイント

・気になる人には電話をかけて、つながりを切らない
・同じ思いをもつ仲間とつながり、広げる





北海道大学の学生とオンラインでつながり、ノウハウを伝授

つどい場運営者とのオンラインミーティングで、
支え合いの輪を広げる動きに

見守り拡充、買いもの代行も

あったかふれあいセンターとかの（高知県佐川町）

高知県佐川町斗賀野（とかの）地区にある小規模拠点施設※「あったかふれあいセンターとかの」では、新型ウイルス感染拡大に伴い、「集い」（常設型サロン）などの利用者受け入れを3月9日以降休止（※4月1日に再開し、10日から再び休止）しています。

あったかふれあいセンターとかのの「集い」（常設サロン）。現在は休止中

一方で、一人暮らし高齢者などの見守り訪問は継続しています。4月中旬からは、集いの常連利用者も見守り対象に加え、件数は従来の約50世帯から約130世帯に。スタッフ4人が手分けして訪問し、手づくりの布マスクを渡すなどしながら、生活状況を確認しています。見守り訪問の対象者はスタッフだけでなく、近くの住民にも気にかけてもらうようにしています。

見守りの対象者には、買いもの代行サービスも始めました。電話で依頼を受け付け、スタッフが依頼者宅に行き、購入する商品のメモと代金を受け取ります。近隣のスーパーなどで購入したあと、依頼者に配達をします。こうした一連のやり取りも見守りを兼ねています。

「以前は集い送迎の途中、スーパーに立ち寄ることで買いもの支援をしていました。現在は感染予防のため本人をスーパーに連れて行くのではなく、代行しています」とセンターのコーディネーター、森田有紀さん。

こうしたセンターの対応は、事前にチラシをポスティングして周知しました。併せて、体操や畑仕事などに取り組んだり、友人らと連絡を取り合ったりしているかどうかを書き込むカレンダーも配布し、介護予防のセルフチェックを促しています。チラシなどを配布したあとは必ず電話をかけ、ポストの中身を確認するよう呼びかけています。

電話や訪問を通じて、「裁縫の得意な複数の高齢女性が手づくりマスクを近隣にプレゼントしている」（森田さん）といった住民同士のつながりと支え合いも、新たに知ることができています。

※あったかふれあいセンター　高知県独自の地域福祉小規模拠点施設。市町村が県補助を活用して開設。運営は社会福祉法人やNPO法人、民間企業・団体などに委託。

つながるポイント

- 「集い」は中止となっても、見守りや買いもの代行でつながりを切らない
- 体を動かしたり、友人とのつながりを聞き取り、介護予防のセルフチェックを促す
- （チラシなどを）「配りっぱなし」にせず、電話でも声かけ

〈各地の実践をお寄せください！〉

「つながる通信」では、各地での実践を募集しています。「わがまちでこんな取り組みをしている」「私たちはこんな工夫をして、気になる人とつながっている」、そんな情報を編集部までお寄せください。後日、編集部より電話などで取材をさせていただき、本通信やホームページ等で紹介させていただきます。情報は、E-mail：t-net@clc-japan.com、fax：022-727-8737まで。E-mailの場合は、タイトルを「情報提供」としていただき、①活動内容、②ご担当者名、③ご連絡先を記載ください。本通信の感想やご要望もお気軽にどうぞ！

編集後記

先日、あるお寺の前を通ったら、「和顔愛語」と書かれた看板が掛けられていました。暗いニュースや深刻な状況を見聞きするたびに、自分自身にも余裕がなくなり、表情や気持ちがこわばっていたことに気づかされました。こんなときだからこそ、この言葉を刻みたいと思っています。